

チューリッヒ医史研究所図書館保管の 1928年6月8日東京学士会館開催の スイス・バーゼル大学耳鼻科 ジーベンマン教授追悼録より

高橋 薫¹⁾, 高橋日出雄²⁾

¹⁾タカハシクリニック ²⁾高橋クリニック

はじめに

明治の終わりから大正までの20年間で13人の日本人耳鼻咽喉科医が、スイス・バーゼル大学耳鼻咽喉科フリードリヒ・ジーベンマン教授の元に留学している。1928年4月4日ジーベンマン逝去その2ヶ月後の6月8日 新装なった東京一つ橋学士会館にて留学していた医師達が発起人となりジーベンマン教授追悼会が、全国から参集した日本人耳鼻科医及びスイス人Doctors合わせて50有余人により開催された。スイス人参加者トーマン

博士によりジーベンマン未亡人に手渡された集合写真を含むフリードリヒ・ジーベンマン先生追悼録・及び参加者芳名帳がスイス医史研究所図書館(Bibliothek des medizinhistorischen Instituts, Zürich)に保存されていた。著者らの母の伯父耳鼻科医黒須巳之吉のスイス留学足跡を追う中で偶然バーゼル大学同窓会長により発見された二冊である。著者らは、2018年5月1日スイス・バーゼル大学を訪問し、同大学同窓会長のFröscher元病理学教授の尽力で拝見・複写を持ち帰ることが出来た。追悼録には、当時の錚々たる日本人耳鼻科医の講演録が記録されていた。Pierre-Yves DonzéのStudies Abroad by Japanese Doctors, 1862-1912に



図1 フリードリヒ・ジーベンマン先生追悼録表紙

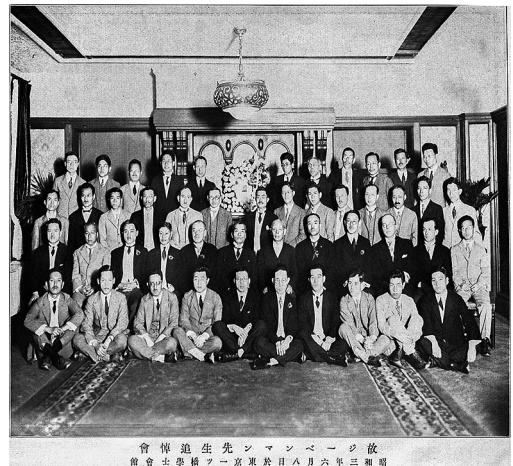


図2 集合写真

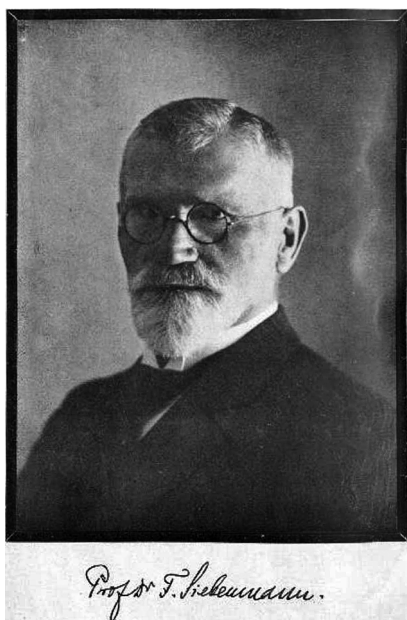


図3 ジーベンマン教授

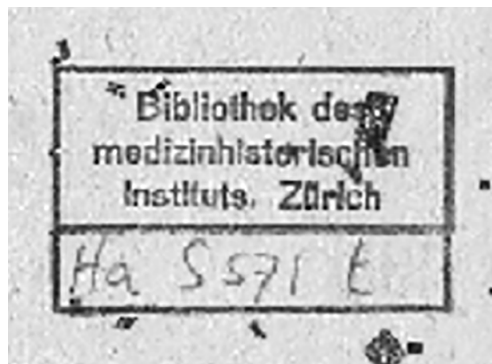


図4 スイス医史研究所図書館印

よれば、532人の医師が留学し、耳鼻科医(Ear, Nose, Throat ENT)は、38人との統計がある中で時期は、ずれるが1905年から1924年の間に13人の日本人耳鼻科医が、追悼会参加者の横浜の開業医スイス人パラヴィチニーの言を借りれば、欧州小国スイス・バーゼル大学ジーベンマン教授の一つの教室に留学していたことは、驚きに値し、留学自身自身の言葉で語られている追悼録の内容を公にすることは、当時の留学の実態を知る上で有意義と考え資料として原文を提示する。

フリードリッヒ・ジーベンマンの経歴

フリードリッヒ・ジーベンマンは、1852年5月22日 Uerkheim で牧師の父親のもとに生まれた。チューリッヒ・ヴュルツブルク・ベルンの各大学で医学を修めた後ウィーン・ブレスラウ・ミュンヘン各大学で耳鼻咽喉科と喉頭学を学ぶ。1888年教授職資格を得て1892年バーゼル大学耳鼻咽喉科教授。1896年-1922年バーゼルス立病院及び Bürgerspital バーゼルの耳鼻咽喉科クリニックの所長として勤務。バーゼル大学耳鼻咽喉科にて、診療及び教育に従事し内耳の解剖学的研究、難聴病理学を含む研究。1928年(昭和3年)4月4日バーゼルにて前立腺癌で亡くなる。

以下追悼録より引用(原文)

故ジーベンマン先生追悼會

昭和三年六月八日午後六時より新装成りし一ツ橋學士會館に於て、故ジーベンマン先生追悼會は本邦門下生の發起にて催されたり。會する者五十有餘人斯道の耆宿岡田、金杉兩博士の參列あり、遠く參會せられし者に淺井、中村の兩博士あり、瑞國のドクトル三名又列席す。

六時半追悼式を舉行す、壁間、先生の小影は美しき花環を以て飾られ尚其の傍には先生の遺著の一部及本邦門下生の業績の一部を陳列して先生の偉大なる學問上の功蹟を彰はせり。何等の修飾を用ひざりしも式場は自ら嚴肅の氣に滿つ、先づ増田東大教授立ちて當日の司會者として開式を宣し、同時に先生の履歴及學問上の遺蹟に就て約二十分に亘りて詳述す。一同先生の遺業の偉大なるに驚く、次で淺井博士は「ジーベンマン先生の嚆の研究に就て」の演題の下に三十分に亘る講演を試みらる、金杉、岡田の兩博士又交々立ちて同先生の學識、人格を稱え學蹟及殊に本邦門下生に對する懇切なる指導に向つて感謝の辭を捧げらる、最後にドクトルパラヴィチニ氏今夕の追悼式に對し敬虔の態度を以て感謝の辭を述べられ、又瑞國公使の書翰を黒須氏代讀さる。之にて嚴肅裡に式を閉づ。式後直に記念撮影あり、此寫眞は來會者一同の自署の小冊子と共に遠くバーゼルに

《追悼録より》

13人の日本人留学者と留学時期

表1 ジーベンマン教授の元に留学した13人の日本人耳鼻科医と留学時期

1	○浅井健吉	1905-1908	明治35年京都帝国大学にて初めて耳鼻咽喉科診療開始
2	吉井丑三郎	1906-1909	明治35年東京帝国大学卒 大正3年東京帝大助教授 大正13年7月28日教授 7月29日退官
3	久保猪乃吉	1906-1907	明治33年東京帝大卒 明治36-39年ドイツ留学 明治40年京都帝大福岡医科大学教授 昭和3年日本医史学会創立発起人
4	松本貞二郎	1911-1914	明治24年大阪医学校卒 明治26年創刊耳鼻咽喉科雑誌初代編集者 明治44年ミュンヘン大学ドクトル試験合格
5	○中村豊	1912-1914	明治35年愛市医学校卒 内地留学(東京帝国大学岡田和一郎教授) 明治38年愛知県立医専現名古屋大学初代教授
6	○佐藤信郎	1913-1917	秋田県立医学校成医会講習所東京病院東京慈恵医院医学校耳鼻咽喉科第一回卒業 明治30年大日本耳鼻咽喉科会々報編集主任
7	○黒須巳之吉	1914-1916	大正元年東京帝大卒 金杉英五郎病院 パーゼル大学ジーベンマン教授臨床助手 慈恵東京病院耳鼻科 関東大震災を期に東京永田町にて開業
8	小野道衛	1916-1917	明治38年東京帝大卒 京都帝大福岡医大耳鼻咽喉科勤務
9	香宗我部壽	1919-1922	明治41年京都帝大卒 北海道帝大初代耳鼻咽喉科教授
10	○増田胤次	1918-1921	明治43年東京帝大卒 大正7年東京帝大教授
11	松本本松	1920-1921	明治43年慈恵医専卒 大正12年東京医専教授 昭和18年順天堂医専教授
12	阪井清	1920-1921	明治35年東京帝国大学卒 京城医学専門学校耳鼻咽喉科教授
13	○津田終吉	1923-1924	済生学舎卒 青森ホロサク病院 明治39-41年東京帝大耳鼻咽喉科介補 慶應大学解剖学部

○は、追悼会にて卓上談が残されている。

《追悼録より》

日本ロシュのトーマン (H. E. Thomann) 薬学博士が留学生の仕事を称える挨拶文、及び横浜を

住 開業医スイス人医師パラヴィチニー (Fritz Paravicini) による謝辞。

(Ehrung eines Schweizer Gelehrten und seiner Arbeit in Japan) Dr. Thomann

一人のスイス人学者の栄誉と彼の日本での功績 トーマン薬学博士

今年6月6日夕方6時30分、4月4日にバーゼルで亡くなったジーベンマン教授の栄誉をたたえる記念式典が東京の学士会館で、東京帝国大学耳鼻咽喉科学正教授のMasuda教授の司会の下で開催された。日本式に緋のペールで覆われて、白いなしこと赤いバラの幅広い枠の中で落ち着いた写真が約50人の傍にあった。一部の人は大阪や名古屋からこの式典に参加した。日本耳鼻咽喉科学会の弟子や会員達はその向かいにいた。その写真は彼らのより近くに運ばれ、Masuda教授は他の各演者と同様、ペールの換気をした後、写真の前で簡単なお辞儀をして故人の畫に敬意を表し、(以下の追悼演説を行った。演台の周りにまどめられたジーベルマンの仕事は、演者にジーベルマンの、学問の設立者として、研究者として、先生としての評価のための案内を与えた。彼は学習過程、学術的過程の復活、特に、迷路の解剖の知識に関する功績を取り上げた。そしてさらに、ヨーロッパと日本で大学教員として働く多くのジーベンマンの弟子達が、今日指導的立場にあることを敬意を表した言葉で述べた。続いて、大阪からのAsai教授の、ジーベンマンの聾聵の研究における偉大な業績についての長い演説があった。そこではAsai教授は故人の、一番古い日本人の弟子として熱心に協力したこと述べた。Kanasugi教授は日本の本質であるよい評点を与えた。彼は日本耳鼻咽喉科学会の創立者であり、名誉会長でもある。そしてOkada教授とともに日本の耳鼻咽喉科学の功績の多い講演者の一人である。そこでは参加者は活気があり、彼はまた日本耳鼻咽喉科学の功績の多い後援者の一人である。彼はまた、日本が引き継ぐべき子孫の格言に結び付けた。「お前の上役、両親、先生の親切を忘れるな」。Kanasugi教授は自分の出版で欠の事を表明した。彼が単に無視をするだけでその他の緊急の義務を可能にすることが出来た。彼がジーベンマン教授に対してどんなに感謝に堪えぬと。彼の先手の能力に敬服することによって、どんなに彼がうまく自分の心中を言い表しても、また、とりわけ彼の人格への尊敬を表している。Dr. Paravicini(東京)はこの記念式典に出席したレポーターとしてのDr. Furtwaenglerも含めて3人のスイス人の名前で、この栄誉は我々の有名な同期に、また、彼を通じて我々の国に日本耳鼻咽喉科学会から与えられたものであると、簡潔かつ心のこもった言葉で謝辞を述べた。Okada教授は、特にジーベンマンの日本の弟子のために、さらには素晴らしい謝辞を述べた。日本における故人達の絶え間ない親切な励みによって大きな、そして持続的な収穫が得られた。Dr. Kurosuiはさらに出席できなかったスイスの代理公使の手紙とSakai教授(京城、Korea)の電報を読み上げた。続いている簡単な夕食会では、いずれもジーベンマンの弟子であるSato、Asai、Nakamura(名古屋)、Kurosui、Tsudaの各教授が自分達の先生と講義や大学病院で一緒に働いた真剣かつ楽しかった、また、仕事を離れても活気のあった時の個人的な記憶を呼び起こした。これらの感謝の言葉はジーベンマンの日本の弟子達が、彼を人生の仕事上の関係だけでなく、純粋な人間らしい関係で、変わらない敬意と感謝の追想を持ち続けるだろうということを快く示している。レポーター(Dr. Furtwaengler)の短い言葉の後、この世の参加者はそれぞれに帰って行った。我々の偉大な同期ジーベンマンに対する、この日本の記念式典がいつまでも続く価値を有することは、弟子による大きな感謝を持っての先生とのつながりや尊敬の証明であり、それは東洋人にとっては、人によって必ずしも同じではないだろうが、教育された特有のものである。それはジーベンマン教授の遺族に日本耳鼻咽喉科学会とそのゲストのあいさつ文を送ったことによっても表されている。

図6 トーマン薬学博士挨拶文(武田信彬東京慈恵会医科大学内科元教授による翻訳)

東京 1928年6月8日

ジーベンマン教授の弟子や崇拜者達が耳鼻咽喉科学の偉大な指導者で師匠の追悼のために本日東京に集まり、また、自分たちの尊敬の印として署名入りのこの本を御遺族にささげる
(Dankrede. Dr. Paravicini) 感謝の言葉 Dr. Paravicini

- ・我々はあなた(ジーベンマンのこと)の専門部門に所属していないが、あなたが我々を今日の記念式典に呼んでくれたことに感謝するという名誉ある義務が、ここにいるスイス人の最年長者ということに私にまわってきた。

日本人があなたを耳の先生として感謝し、信奉しているのを見ることは素晴らしいことである。ひょっとしたら、これは高潔な侍の誠実さの現代における一つの形かも知れぬ。我々スイス人は特に、遠く大きい日本が尊敬されるようになったことを我々小さな国の男が創りだしていることを誇りに思っている。最近ここで、偉大な教育者ベスタロッツ、赤十字の創立者デュナン、そして本日、耳鼻咽喉科学のハイオニアのジーベンマンの式典が催された。

私は彼と、その後継者であり、私の研修仲間だったオッピコーファーを個人的に知っている。ジーベンマンに関する私の記憶は、もちろん大体において喉頭鏡講習に限られるが、そこで私は、やさしい、しかし幾分辛辣な教授から厳しい叱責を受けた。なぜなら、私は喉頭鏡をガスの炎の上で正しくない面で保持していて、当然喉頭鏡の裏の箔を傷つけたからである。私の耳鼻咽喉科への転科が遅かったことも、積極的な性質というより、むしろはるかに、消極的にした。その間、私の親しい友人でもある隣人が私の長引く中耳炎を治療してくれた。彼もまたジーベンマンの弟子であった。そして、私は彼に間接的にも感謝している。そして、彼の部門の代表者であるあなたに対して大いなる尊敬の念をもち、また、あなたの仲間と一緒に夕べの催しを過ごせることを喜んでいる。

私はあなたが我々の同期、そしてまた我々の祖国に今夕証明したこの栄誉に対して、私の国の人々の名前においてあなたに感謝する。

図7 パラヴィチニー医師の感謝の言葉(武田信彬東京慈恵会医科大学内科元教授による翻訳)

式辭

増田胤次(東大教授の開会式の辭)謹述

《追悼録(原文)より》

「吾々の常に敬愛せるフリードリッヒ、ジーベンマン先生には本年四月四日攝護腺癌腫にて永き御病苦を忍ばれたる後七十六歳の御高齢を以て瑞西國パーゼル市に於て御逝去に相成りましたことは耳鼻咽喉科學界に於ける重大なる損失であることは申す迄もなく親しく先生の御薫陶を蒙りました吾々門下生にとりては實に哀惜の情に堪えざる次第であります。

日本に於ける門下生が發起となりまして先生を追悼すべくこの會合を企てましたる所幸に各位の御賛同を辱ふし殊に大日本耳鼻咽喉科會々頭たる岡田博士及同じく名譽會頭たる金杉博士の御臨席を得且つ又兩先生共に一場の追悼の辭を御述べ下さることを御快諾下されましたことは吾々の企てをして一層光彩あるものとせられたることでありまして開會に當り茲に御來會の各位に御禮を申し上げると共に兩先生に對して特に謝意を表する次第であります。

私の如き淺学非才なる者が學徳共に一世に高きジーベンマン先生の如き御方を窺ひ奉ると云ふことは實に僭越至極のことで勿論井底より蒼空の大を計るが如き愚に終ることでありませうが敢て發起人を代表して茲に先生の御事蹟を申述べて聊か先生を偲ぶの一端と致したいと存じます。

ジーベンマン先生は西曆千八百五十二年瑞西國アールガウ洲に生れチューリッヒ、ウエルツブルグ、ベルン、及パリの諸大學にて醫學を修めベルン大學にてコッヘル教授の下にて外科學を修めたる後、一時郷里にて開業せられ千八百八十三年に耳鼻咽喉科學專修の爲ヴィーン及プレスラウに赴き、後千八百八十七年に再びミュンヘンに赴きて斯學を修め千八百八十八年居をパーゼルに移しブルックハルト、メリアン教授の後を享けて同大學耳鼻咽喉科主任となり千八百九十二年に同大學助教授、千九百三年正教授に任ぜられ千九百二十二年教職を後繼者なる現教授オッピコーフェル氏に譲るまで在勤せられたのであります。

この長き御生涯の間に先生の各方面に成し遂げられたる御事蹟は實に多大なるものでありまして到底短時間内に申述べることは不可能でありますが以下其主要なる點につき其大要を述べたいと存じます。

先づ先生の學問上の御效績に就いては先生が主として研究せられたるは耳科學就中耳迷路の解剖及病理解剖學でありまして此方面に於て先生が幾多の偉大なる業績を發表せられ世界の第一人者であらせられたるは既に學界周知の事實でありまして實に先生は耳科學が一般醫學より分離したる搖籃の時代に於て幾多の貴重なる業績を以て尚未だ幼弱なりし斯學に確固たる學問上の基礎を與へられ以て其中興の祖となられたのでありまして今日耳科學の燦然たる學問上の精華は實に先生の不屈不撓の努力を以て完成せられたる幾多の業績に負ふ所大なるものがあります。

先生及門下に依りて爲されたる業績中には實に多數の劃時代的な貴重なるものがあります此等の業績の上より先生の御研究の模様を拜するに先生の研究上の着眼は常に必ず將來に於ける學問的進歩の根幹をなすが如き所謂 „Grund legend“ の問題に向けられ而も此等を驚嘆すべき努力、熱誠と細心なる學問的注意とを以て觀察、研究せられ之が成績の判定に当たりては極めて忠実なる研究者の態度を以て臨まれたのでありまして先生が其壯年時代に發表せられたる *Bardleben* 解剖學全書中の中耳及迷路篇の如き、*Otomykosis* 耳迷路の *Korrosionsanatomie*、耳迷路の血管分布に關する研究の如き今尚後進學者の研究上の指針たるを見ても如何に此等の研究が學會に貢献することの大なりしかを識るをうるのであります。又先生の聾啞の病理解剖に關する研究の如き實に *Denker* が千九百二八年版の耳鼻咽喉科學全書中聾啞に關する病理解剖の記載の冒頭の一節中 „Die Arbeit Siebenmanns stellt für alle Zeiten einen Markstein in der Geschichte der Taubstummheit dar“ ……と賞讃せるが如く先生の研究によりて聾啞の病理解剖は新時代に入り以て今日の域に達し得たのであります。

又先生が其門下殊に吉井及 *Nager* をして爲さしめたる迷路生體固定法及膜様迷路死後變化の研究

の如き實に今日に於ける耳迷路の實驗的病理組織學の基礎を爲すものにして之によりて如何に多數の研究業績が洋の東西を問はず産れ出たるかは既に世の知悉せる所であります。

又音響刺戟に因る耳迷路の損傷、諸種藥物による聽神經炎及耳硬化症の病理解剖に關する研究の如きは此等が如何に吾が學界に於て大なる反響を喚起し又如何に幾多の新研究の基礎となり又如何に後進に研究上の好指針を與えたるかは私が茲に喋々するを要せざる所であります。

今夕若し此等多數の貴重なる業績の内容に立ち入りまするならば到底之を述ぶるの時を有せざるものであります。如何に先生の業績が吾が學界に重きをなしておったかを申して見ますれば實に前世紀の終り頃より最近に到るまで耳科學就中其解剖及病理解剖の方面に於ける研究及論議は洋の東西を論ぜず先生及先生の門下によりて爲されたる業績を中心として行はれ先生は常に此方面に於ける世界的の指導者であらせられ其狀恰かも諸群星に君臨する太陽の如き觀があったと申しても決して過言ではなく私は私が如何に修辭に努むるとも決して先生のこの赫々たる學問上の效績を適當に言ひ現はすことが出来ぬを悲むものであります。

先生は斯く一方には偉大なる世界學的學者であらせられたると同時に他方には大なる徳望を有せられたる方でありまして先生が終生教鞭を執られたるバーゼル大學は申す迄もなく瑞西國民が先生あるを以て誇りとしておりましたことは私の親しく見聞し得たる所であります。

先生は又後進の扶掖に対しては眞に寢食を忘るる程でありまして先生の吾等後進者に對する態度は實に「懇切」なる一語に盡きるのであります。従て先生の學を慕ひ徳を仰て其門下に斯學の研究を志したるものは當に瑞西のみならず獨逸、奧太利、佛蘭西、伊太利等にも尠からず殊に遠く千里を距つる吾が日本よりも多數に上りまして現にバーゼル大學に先生に後繼者たる Oppikofer 教授、チューリッヒ大學耳鼻科主任たる Nager 教授、ベルリン大學耳鼻科主任たる v. Eicken 教授等は其著聞せるものであり又吾が邦に於いても今回發起人として其名を連ねたるが如き多數の門下生がある

のでありまして先生は殊に吾が邦に多數の門下生を持っておられる点に於て先生が吾が日本に於ける耳鼻咽喉科學の進歩發達に貢獻せられたることの多大なりしことは深く感謝せねばならぬことと存じます。

又親しく先生の門下に入らずともバーゼルを過るが如き何れの邦の同學の士も必ずや先生の教室を訪ね先生の讐咳に接せざるものはなく v. Eicken がキリアン先生の追悼辭中にキリアン先生ありし當時のフライブルグは鼻喉頭科學者のメッカであったと申しておりますが私はこの言葉を移してバーゼルは實に耳科學者ノメッカであったと申したいのであります。

先生は此度齡、古稀を越える六年餘りにて其長かりし御一生を終らせられ幾多の貴重なる效績を遺して其御英靈は終に天に歸せられたのであります。先生が現世に遺されたる業績は年を経ると共に益々其根を張り枝を榮えてか擴がり行くことと信じます。日本に於ける吾等門下生も亦先生の在ませし日の御温容を偲び其御教訓を思ひて益々斯學の進歩初達に盡瘁し以て先生より受けたる御恩の萬分の一にも報い奉らんことを期する次第であります。

先生の如き學徳一世に高かりし學界の巨人を偲ぶに当たり淺學非才唯想ありて言足らず、汗顔の至りながら以上を以て謹で先生を追悼し奉るの辭と致します。」

《追悼録より》

次に日本人留学生一番目で明治38-41(1905-1909)年に留学の淺井健吉により30分間ジーベンマン先生の「聾啞研究創案せる顕鏡検査の成績を著述した「聾啞解剖病理の特徴」の概要を述べる。以下14ページに亘り講演(原文省略)。

次に金杉英五郎による追悼の辭

《追悼録(原文)より》

「司會者 増田教授並に發起人各位

本日ジーベンマン先生の追悼會開催に際り余も亦不圖一言哀悼の詞を呈するの機会を得たること

を深く光栄とするものである。

参列の各位！

三不忘は是れ古今東西を問はず人道の基根にして、則ち君国の恩を忘れず、父母の恩を忘れず、恩人の恩を忘れざる可きを称するものであって、之を守るときは国家安寧隆昌、之を失うときは国家紊亂衰頹するものなること歴史に徴して瞭かなる事実とす、然るに輓近社会の状態漸次複雑と為るに従って忘恩の徒諸所に続出し、恩に報ゆるに仇を以てすることは恰も国債務者が債権者に返金せずして却って悪口憎言すると齊しきものさへあり、甚しきに至りては君国の大恩を忘れて反逆を企つるものを生ずるに至りしこと等識者の一様に痛嘆措く能はざる所とするものである。然るに今回増田教授其他の諸氏が万里隔絶の恩人の為めに盛大なる追悼会を開催せらるゝことは実に美学にして世相人心に好影響を與ふる少なからざるものなることを信じ深く敬意を表する次第である。実は拙者今夕は先月来の前約にて他に出席講演の爲め一度は出席不可能の返答を致し置きしが他所の講演は復び機会を得べけれども篤学なる先輩の追悼会は其の機会復び来らざるを慮り、他を断つて奮って罷出でたる次第である。

故ジーベンマン先生の学界に於ける成績に就ては増田教授既に詳述せられて漏らす所なければ敢て蛇足を加ふるを欲せざれども、其健実なる研究方針と、それに追隨する独創的業績は吾人後輩の深く敬服感謝する所であつて又大に学ばざる可らざる点ならんと信ずるのである。此希有なる同学者の長逝は学界に於ける大なる損失にて、実に哀悼に勝へざる次第である。先生の逝去は其齡七十七歳にして古希を過ぐるること七にして所謂喜の字なれば普通の場合に於ては天寿を完うしたるものとして慶賀すべきであるが、有為の篤学者、非凡の先導者たる先生としては其寿の一年宛も延長せんことを切望するものにて重ね々痛惜に堪へざる次第である。

余の先生の名を知りたるは明治二十四年伯林に開かれたる第十回国際医学会場にして其耳科部に先生の名ありたるに基く、当時先生はプライベートドツェント時代にして、未だ学界の主要部ならざ

りしやうに追憶せらる、次いで明治四十年余が日本学会の代表者として維納に開きし国際喉頭科学会に臨席せし際帰途各地の大学を歴訪し、偶まフライブルヒのキリアン教授を訪へしに、当時其助手たりしフォン、アイケン（現時伯林大學教授）をも知り、会談中余はこれよりバーゼルにジーベンマン教授を訪はんとする旨を語りしに、フォン、アイケンは余も亦これよりバーゼルに往くものなれば同行せんとて氏の案内に依つてジーベンマン先生を訪ふたのであつた。当時フォン、アイケンは一週三回ジーベンマンの実験室に通学しつゝありたるなり、ジーベンマンに会談中ウェルツブルヒに学生生活を為せしきゅうじ（舊時）など語り出し、キヨルリケル、フォン、トレルチ等に師事せしことなども雑談中の一なりしことを記憶す。其時余は直覺した、先生の今日ありしは其の素地をキヨルリケル、フォン、トレルチ等に負ふ所少なからざりしことを、何となればキヨルリケルは独創的解剖大家の一人にして、耳科のフォン、トレルチ亦イタール、トインビー等の学派を継ぎたる基礎的医学建設者の一人であつたからである。

率直に申せば先生は治療家、手術家としては普通の技量たりしものと聞き及びたれども、其基礎医学的方面には開道的業績を寄與せられたるものにて、特に内耳の解剖、生理、病理等に就いては先人の未だ明解し能はざりし事項を開きたるもの少なからずして唯驚くの外なし、凡人尚ほ能く之を為す、然れども其の基礎的微妙の討究に至りては容易の業に非ざること喋々を要せざる所にて、是れ吾人の深く先生の長逝を惜しむ所以である。

先生よ、先生の後継者としてはオッピコーフェル、ナアゲル、フォン アイケン其他有為の士少からず、而かも千万里隔絶の我日本国に於ても有為の門下十指を屈すべく、何も精励にして倦むを知らざるものありて、何れも厚く先生の恩に感じ深く先生を敬慕す。先生請う冥せよ焉云々。」

次に岡田和一郎東大教授の追悼及び感謝の辞。

《追悼録（原文）より》

「諸君 前の「バーゼル大學耳鼻咽喉科學正教授ドクトル、フリードリッヒ、ジーベンマン先生は業に七年前定年期に達せられたるの故を以て現職より引退せられて爾來悠々自適多年斯學研鑽の爲めに得られたる身神の御疲勞を慰めつゝ今年正に喜の字の御高齡に達せられたのであるから功成り名遂げられたる先生御自身では今ま御永眠になったとて何の御不足もなかったかも知れませんが吾人多年陰に陽に先生より多大の恩誼を忝うしたる同學の後進者は皆な先生に尚ほ數年の御健在を祈って一面に於て専ら御慰安に最も適したる樂しき月日を送って戴くべく又一面に於て一度は東洋方面にも駕を枉げられて先生の學派に属する多数の青年同學者の築き上げたる吾學界の進況をも視て戴きたく心から祈って居つのである。然るに先生は本年四月四日を以て忽然として不歸の旅程に上られて忽然として吾人をして失望悲嘆の極に達せしめられたのは誠に此上もなく残念であり又哀悼の情に堪へない次第であります。

私は先生の御生前に不幸にして親しく先生の教を仰ぐ機會を得なかつた事を無上の恨事として居ります。私が約三十有餘年前獨塊に留學した際には主として伯林、維也那、民顯等に居りましたので當時己にバーゼルに在られた先生には唯だ僅か二回程學會（カールスバードと民顯とに開かれたる専門學會）に於て其の温容に接した位のことのみであった。併し私は僥倖にも間接に先生の知遇を忝ふして久き間先生の遠在の友人又は同僚の一人として通信上の御交誼を繼けて下さつたことを私は無上の光榮とし又欣幸として居りました。隨て私は常に先生を世界學界の偉人として又と當世の研究者中の第一人者として滿腔の敬意を表して居つたのみでなく過去十四五年來先生は本邦出身の青年同僚を特に愛撫し下さつて先生の懇切なる御指導と不斷の御鞭撻とに由つて皆をして相當に立派なる價值ある業績を世に公になさしめ且つ此等有爲の同僚が續々歸朝して皆學界の要路に又は實地醫界の重要位置に當りて本邦耳鼻咽喉科學發達史上に顯著なる不動的基礎を致さしむべく御教養下さつたことに依りて先生を吾人の大恩人とし又恩師として益々尊敬の念を深くして居つたの

である。私は此意味に於て先生の訃音に接して最も深く悲しむものであります。本邦出身同僚中にて先生の門下生として先鞭を付けた者は私の東京「クリニック」出身の淺井健吉博士でありました。次いで第二番に先生の御世話になった者は同じく東京「クリニック」出身の吉井丑三郎博士でありました。吉井博士が先生の熱心なご指導に由りて例の生體固定法を完成し之を使用して聽器の音響的損傷に就ての實驗的研究を遂げ之を獨逸の専門學會に於て公表せしめられて忽ちに世界的の好評を博するに到つたので當時私は直に一書を先生に進呈して先生の吉井氏に與へて下さつた御指導と御援助とに對して心計りの謝意を表しました。所が先生は其後二か月を経ない内に長文の手書きを送つて下さつて先生から却て東京「クリニック」出身者の研究に由つて斯くも立派なる業績の發表を得且つ我「クリニック」の名譽を上げることを得たことに就て深甚の謝意を表すとの難有賛辭を賜つたと同時に先生は本邦出身同僚を其素質に豊かであつて勤勉なるが爲めに愛する者であるから將來續々有爲の青年同僚を送つて呉れたなら出来るだけ便宜を與へて益々多くの有益な業績を彼等の手にて發表せしむることを望むとの旨を附記して下さつて大に恐縮したこともあつた。爾來中村豊、坂井清、佐藤信郎、黒須巳之吉、松本本松、増田胤次、香宗我部壽等の諸氏前後相次で先生の御世話になつて何れも皆先生の御指導に依つて立派なる業績の發表を遂げたり又は先生の助手となつて立派なる臨床家となつて歸朝して今や本邦耳鼻咽喉科界の中心人物とし活動しつゝあるのみでなく特に吉井氏の歸朝以來本邦我領域における實驗的研究が大いに其面目を改めて當時以降晩今に到る迄に學界に公報せられたる實驗的研究は其量に於いても又質に於ても世界中何れの國のそれに比して決して遜色のなきことを自負し得るの程度に達し得たのと及び私の多年關係したる東京帝大耳鼻科「クリニック」は私の停年退職後の後繼者として増田教授を迎へ次で新設されたる北海道帝大耳鼻科「クリニック」は香宗我部教授迎へて今や盛んに先生の學風に従つて本邦耳鼻科學の發展に貢獻しつゝあるの事實とに徴して私はどうし

でも先生に對して特に深厚の謝意を表さずには居られませんでした。

私は、約六年前米国ワシントン市の汎米鼻咽喉學會の招きに應じて特別講演に參列致しました際帰途歐洲に渡りまして序に是非共先生をバーゼルの「クリニック」を御訪ねして先生の警咳に接して教を仰ぎ又多年抱懐して居った感謝の意をも表したいと喜んでバーゼルの「クリニック」を訪ひましたが折悪く当時先生は御旅行中でご不在であつたのでオッピーコッフ教授に迎へられて種々談話を交換し先生の近況を承知し本邦出身同僚を聞き後晩餐の饗應を受けて極めて愉快にバーゼルの一晝夜を消すことが出来ましたが此時も終に先生と面語するの光榮を擔い得なかつたことを終生の恨事として居りましたが其後先生は又長文の手書を裁して先生からも私の訪問に対する謝意を表され且つ面会の機を逸したことを遺憾とする旨を記され又同時に前に私がオッピーコッフ教授を介して記念の爲めに先生に持参進呈したる日本美術品に対して謝辭と之を記念として永く愛玩する旨とを附記して送って下さつたこともありました。去れば此処に前言を再言しますが私は終に此學界の偉人より親しく教を仰ぐことの出来なかつたことを私の終生の恨事と致しますが併し私は私の最も親しき本邦出身の同僚諸氏が先生の教室に在って良く先生の御意志に迎合されて真面目に熱心に奮勵努力されて皆立派なる業績を完成して下さつた御陰で間接的に先生の遠在の友人としての知遇を忝ふして居つたと云うことを私の無上の光榮とし又誇りとするに足ると信じて居りました。

今や此學界の偉人吾等の大恩人は己に御永眠遊ばされて先生と私等とは幽明處を別にすることとなりまして最早永久に私等は先生の温容を拜することが出来ません又永久に先生に對して直接に私の深厚なる謝意を表すことが出来ません依つて私は茲に先生の御尊影に對して大日本耳鼻咽喉科學會を代表して謹で深甚の敬意と謝意とを表します。」(禮拜す)

佐藤信郎の卓上談。

ジーベンマン先生を憶ふ

《追悼録(原文)より》

「私は大正二年十月より同四年十一月まで満二ヶ年と二か月間、バーゼル大学でジーベンマン先生を唯一の恩師として指導を唇ふしたのであります。丁度見学十ヶ月目に歐洲大戦争勃發の爲めに、研究上の關係で生理學の教授メッツネル先生の指導を受けたのと、現同大學耳鼻科教授オッピーコッフ先生の「オペラチオンヌ、クルズス」に修學致しました外には他に師事したる先生はなく大戦最中に歸朝したる次第であります。爾來平素音信を怠りし罪甚だ深かりしに突如逝去の報に接し哀悼惜く能はざると同時に轉た懷舊の情に堪へざるものがあります。茲に先生の學術上の偉大なる成績以外換言すれば學問以外に聊か感想を述べて先生を偲びたいと思ふのであります。

私の師事したる當時先生は齡既に古稀に近かりしも其の勤勉と其の努力とは到底壯者の企て及ばざるの慨があり、加ふるに頭腦の明敏、記憶力の強健であられた事は、所謂精力絶倫者の模範とも稱すべき觀があつたのであります。千葉眞一君のマナッセ追憶談中「容貌魁偉、丸で日本で見る鍾鳩の像の様で一寸見ると甚だ怖ろしい人でありました。」云々とありますが、我がジーベンマン先生も眼光炯々人を射る其當時黑白の差こそあれ鬚髯深きマナッセ教授に劣らぬ容貌の怖しき方でありました。殊に其人の學業に對する指導たるや實に峻嚴を極め、再三再四の反復實驗を経て確認せざれば止まざるに至つては門下生を泣かしたものであります。其の峻嚴なる点は私の多年師事したる故高木兼寛男爵に酷似して居ると私は思つたのであります。爲めに本邦研學者の誤解を招きたる事もあつた様に私は聞き及んで居ります。

然かも先生の指導は極めて懇切丁寧を極めたものであります。業績審査の際の如き僅々一些事をもしやしくせず、世界的に發表して非難攻撃を容る餘地なき程度に達するまで反復亦反復時間を惜しまれなざれしが如きは、大家の典型として後述の大に學ぶべき事であると信ずるのであります。頭腦の明敏 記憶力の絶大なりし一證として

一例を挙げて見ますと、一顕微鏡標本に就き製作者即ち研究者と意見の相違したる場合に「ラポールフロイライン」に標本棚の第何段目第何號と第何號の標本を持参せよと命じ、毫も過ちなく比較検査を完うして先生自身の意見を確認せしめられたるが如き事再三再四あったのを記憶して居る事であります。

先生の勢力旺盛なりしには屢々驚かされたものであります。時々晚餐の饗應を受けたる事がありました。翌朝午前二三時頃まで談笑歸寓し、其朝六時或は七時執刀の手術は果して施行せらるるや否やを想わしめたる事もありましたが、(無論秋冬の候には彼地はまだ夜が明けません)、古稀に近き老師は毫も疲労の色もなく出院手術を行はれるのであります。蓋し驚くべき「エネルギー」の旺盛を示されるのでありまして、戦争當時助手として勤務されました黒須巳之吉君は恐らく右様の消息は承知せらるる處だらうと存じます。

先生に師事されました本邦研學者は敢て多數とは申されませぬが、極めて少數ではなかったのであります。其の内でも故吉井丑三郎君は餘程お気に入りであったように想像されます。無論私の在学当時の事ではありますが先生は私に「お前は語學が下手で誠に困るが吉井は中々達者であった」とか「お前は中々酒を飲むが吉井も飲んだ。しかし、吉井は仕事には熱心であった。お前もさうしなければならぬ」とか、善悪につけ吉井君の話が隨時出ましたのでさう考へましたのであります。其の吉井君の訃音が恐らく先生に達しない内に先生も昇天せられたものと思へます。殊に吉井君は「ブラーゼ」の、先生は「プロスタータ」の何れも「クレープス」で他界せられた事は、何等かの因果關係でもあるのではあるまいかと老生は感慨無量であります。

終わりに厳格なる先生の半面には子供らしき無邪氣さのありました事を一言申します。前に述べました通り、私の指導を受けて居りました際は歐洲大戦争の最中でありましたので、晝夜の別なく大小の砲聲を耳にしながらか教室に出入りして居りましたのであります。バーゼル市の周囲の高地は殆んどと申しても宜しいと思ひますが、獨逸國

の市、町、村でありまして佛軍の飛行機が時々襲來しまして「ボンベ」を投下するのであります。先生は顕微鏡検査中でも、論文審査中でも彼の飛行機の爆音を耳にせらるるや「來た來た」と叫べば駆け足にて階上に昇られ小望遠鏡で、さも面白さうに倦かず見物さるるのであります。

謹んで哀悼の誠意を表し奉る。」

昭和三年五月七日記

次に先に講演した浅井健吉医学博士の卓上談。

ジーベンマン先生を憶ふ

《追悼録(原文)より》

「二三思ひ出を咄します。先生よりは學問上のみならず道德上の感化を受けた點も少なくなかった。先生の誕生日に甚だ輕少なる贈物を送って御祝をした事があった。所が先生が極東の日本人なる私の贈物を喜ばれたことは喜ばれたが、何だか意味有げに受領せられた、而して翌朝下宿に來た手紙に左の文句があつて誠に恐れ入った。Ihr Eifer u. Fleiss ist ein gutes Geschnk für mich 學問の研究に対して熱心で厳格で私交の慈愛深きに似なかつた、されば教室から出た業績は學界の信用を博した。先生は常に學問上の業績には drei G が必要であると教へられた。Erstens Geduld, zweitens Geld, drittens Geschicklichkeit と。先生は甚だ勉強で朝起であつて、とても私等の及ばぬ所であつた。歐羅巴の冬は日が短く太陽の昇るのも晩かりしを以て、餘程早く起き星を戴いて大學に行くにあらざれば先生の手術を見學することを得なかつた。ある日、私が遅れて手術室へは入っていった時に最早手術が初まりかゝて居った、すると先生私に向つて「日本人は日露戦争の際には夜中より起き出で、敵を襲撃したが、既に戦争に勝利を得た今日に於ては安心して晩く起き出づるに至つたのではないか」と曰はれた。先生の他の誕生日に私宅に招待せられた。すると當日各自の席位を示す記名の「カルテ」が皆な日本知名の士の肖像が繪かれてあるものであつた。それで先生に「私がバーゼルでこれ程多数の日本人を見たことが無い」と云ひました。之れを聞いた隣席の教授夫人

が「先生は日本人が好きである」と付け加へられた。そこで私が、「それ程我々に好意を表せられ而して且つかく偉大なる先生のことなれば必ず他日我國人が續々留學するに至るであらう」と答えた。其後同胞の秀才が私の予言せし如く引切なしに先生の臨床に往きて勉強せられたが、或時甚だ短日月の間、本邦人の居ら無かつた事があつた。すると直ちに私の許へ手紙が送られた、Meine Klinik geht wie gewöhnlich aber Japaner fehlt と記されてあつた。餘程日本人を好まれたものらしい。」

次に遠方より参加の中村豊の卓上談。

恩師ジーベンマン先生の追憶

《追悼録(原文)より》

「前バーゼル大學教授ジーベンマン先生には、長き御病氣の後 本年四月四日 七十六歳の高齡を以て 遂に遠逝せられたる由、御家族より御通知を受け 私は眞に哀悼の至情に堪へません。先生が我専門領域殊に耳科的解剖學及病理學に貢献せられたる偉大なる效績は、萬人周知の事實でありまして、近く雑誌にも詳報せらるゝ事と思ひますから、略しますが、先生の御逝去は實に我耳鼻咽喉科學界の一大損失であります。

私が先生に師事したのは、大戦前明治四十五年六月より大正三年六月に至る二年間で有りました。最初、私がバーゼル市の殆んど中央バルフューゼル・プラッツに程近き、先生の御自宅に先生を訪問したのは、丁度六月下旬で、青葉若葉の翠り滴らん計りの時でした。刺を通じて先生の面會を求め、覺束なき獨逸語を以て、先生の許に、研究したき旨を述べたに、先生は大いに歓迎するが、來月初旬からアメリカに於ける學會に參列する爲め、旅行するから、九月初旬に再び來いと、の事、並びに研究問題を出す、生理學的の者か、或は病理學的の者か、或は實驗病理的の者か、何がよいかと質問せられたので、私は最後の實驗病理的研究の者を望むと御答へしました。然らば「聽器の實驗的結核」か或は「アルコールの聽器に及ぼす影響の實驗的研究はどうだと云はれ、私はアルコールの方をやって見たいと云ひました

ら、直ちに二三冊の「リテラツール」を出して來て、之を能く讀んで置けと云はれ、夫より先輩にして先生の許に研學せられた吉井、淺井兩博士の事を聞かれました。私が先生と初対面の印象としましては、先生は容貌魁偉、眼光炯々人を射る様で、一見恐ろしい様な感がありましたが、又極めて丁寧親切である事を直覺しました。其後長く先生の御指導をうけ、先生の警咳に接するに及んで、益々さうであつた事を感じました。先生は私を呼ぶのに常に Herr College と云はれ誠に恐縮しました。

私の先生に師事した頃、先生は丁度六十二歳で尚矍鑠として元氣壯者を凌ぐ風がありました。夏でも冬でも朝六時頃病院に出勤せられ、六時半から入院患者の手術を始められました。助手や看護婦連には夫れまでに、病床日誌の整理やら手術室及患者の準備をやらねばならぬので大抵五時頃から煌々と電燈をつけてやっていたのでした。私も手術參觀の爲め毎日朝六時頃に起きて病院迄徒歩で三十分間の距離を通ひました。が、冬になって 寒いのと、眠いので、遂に三ヶ月計りで、尻古たれて、後には、面白そうな手術のある時にのみ、行きました。或時先生から「日本人は朝寝坊でいかぬ、吉井君もそうであつた」などと冷やかされた事がありました。

手術がすむと、入院患者の廻診を始められ、夫れが済むと、一旦御歸宅になり十時から十二時迄自宅診療があります(木曜日及日曜日は休診)午後四時より、再び病院に於ける外來患者の診察あり約十名の患者に就て、學生に臨床講義をやられました。診察の際、先生は流石、ベッオールド氏の高弟だけに聽力検査を可なり八ヶ間敷、注意せられ常に連續音叉を能く用ひられました。

先生の手術も随分沢山見ましたが、乳嘴突起の開鑿術は、大に御特意の方で、可なり大なる圓鑿を用ひられ、根治手術の際には、殆ど毎回「ジームス」や硬腦膜が露出する迄、鑿除せられました。之は一面から先生の手術の徹底的なる事を語る者であります。成形皮弁の切り形は必ずV字形にて所謂ジーベンマンの「プラスチック」なる者であります。

上顎竇の「エンピエーム」の根治手術は、犬齒窩より入り、竇内粘膜を剥離し、中鼻道を成る可く廣く開放して鼻腔を交通せしめ、後日此處より洗滌する方法を行はれました。

其外喉頭結核に対する電氣焼灼を度々やられました、眞假聲帯などの潰瘍、浸潤等の場合に殆んど聲帯の全部を焼灼せられました。大抵「バントボン スコポラミン」注射、「コカイン」局所麻酔の下に、直達鏡の管を挿入し、其中に長き焼灼子を通じて焼灼せられました。割合に成績佳良だと思ひました。

外來診察室には、内耳や鼻腔の模型、其他先生の業績たる顛顛骨腐蝕解剖の標本が澤山陳列されてありました。研究室は少し離れて病理學教室と同じ棟の内にあり、茲には「フロイライン」が一人居て（其頃プフマン嬢が居ました）常に切片標本の製作に従事して居りました。耳の連続標本は夥しく多數に貯蔵されてありました、殊に多いのは「オトスクレローゼ」聾啞、遺傳微毒、結核等聽器標本でありました。先生は毎週木曜日並びに土曜日午後には研究室に來られて、出來上がった標本を鏡見したり或は吾々に指導を與へられました。一体此處では標本を切ったり、染めたりする事だけで實驗的の仕事は誰でも生理學教室でやった筈です。約1町計り離れて居りました。其處でメツネル教授並びにマルタン助手指導の下に動物實驗をした者です。吉井博士の仕事にせよ、小生及佐藤信郎博士の仕事にせよ、皆其處でやった者です。メツネル教授も、頗る親切に、指導を與へて下さいました。今尚健在なりとの事です。

ジーベンマン先生は耳科病理學の大家で之に關する業績は頗る多數に有りますが、ウィットマーク教授とは何故か仲悪く常に學問上の敵として論議を戦はせました。吉井博士の世界的業績たる、音響外傷に關する動物試験も、最初ウィットマークが發表したる論文を復試し、其試験方法の不適當なるを指摘し、氏の成績と比較して、殆んど完膚なき迄に反駁した者でありました。私も最初先生がウィットマーク氏と斯る間柄とは知らず、失敗した事がありました。夫れは、自分の「アルコール」試験の標本を染色するのに、所謂

Secundäre Osmierung と云ふ方法を用ひました。之れは、普通ウィットマーク氏染色法と稱へて居りますから、私はうっかり *Secundäre Osmierung nach Wittmaack* で染色したと云った處、ひどく御叱りを蒙り、この方法は決してウィットマークの方法ではない、氏以前に多數の病理學者が行った者であるから、もっと十分に調査せよ、と云はれまして、私は早速圖書館に行き調べた處、成程、他の神經染色に用ひられて居つた事を知りました。

先生の業績に対する審査は、中々峻厳でありまして、少しでも試験成績が怪しいと思つた時には、何回でも復試を命ぜられました。私は、曾て「モルモット」のゴルチ氏器の微細構造を研究した事がありましたが、其成績がウィットマーク氏の結論と全然異なる結果となり、氏の所論を大いに反駁せざる可からざる立場になり、先生に標本を見せて話した處、先生仲々ウンと承知して呉れませんでした。最後に色々の染色法は行った多數の標本を出して説明し、漸く承知されました。先生の學問に対する慎重なる態度が、之を以て窺はれます。

先生の御自宅で毎月一回抄讀会がありました。其時には教室の醫員諸氏、並びにバーゼル市及附近の開業醫の人々が來られ定番の人が抄譯する、之に對して討論批評がありました。皆「ビール」をのみ乍ら談笑するので中々面白く感じました。

先生は、平素至極御健康の方で、小生の在學中など殆んど病氣など無かつたのですが、毎年暑中並びに冬の休暇には、家を締めて旅行に出掛けられました。瑞西は山紫水明の地で、至る處に遊覽地がありますが、先生は好んで、ルガノやサン、モーリッツの方へ行かれた様でした。其外時々日曜日に、先生並びに皆醫局員と共に、私も郊外散歩の御伴をした事が、ありましたが先生の健脚には、いつも驚きました。

日本人で最初に師事したのは淺井健吉君で、其次が吉井丑三郎君、其次が私でした。私の教室入をした頃には、日本人としては、バーゼル市に只一人きりにて、随分寂しい時がありましたが、程経て、大阪の松本貞二郎君が入室せられ續いて佐藤信郎君、黒須巳之吉君が入室せられ大變力強く

感じました。佐藤君とは丁度半々年計り一所に勉強しました。

先生の友情の厚き事は實に感佩の至りでありませぬ、吾々が時々手紙や葉書を出しますと、必らず夫れに対して直ちに返信を下され、詳しく教室の状態や、御家族の動静などを御知らせ下さいました、私はいつも心から感謝して居ました。

私も機会を得たらば 再び渡歐して先生の温容に接し、親しく御物語を承らんとおぼえて居りましたが、今や空しく白玉樓中の人となられ、再び相逢ふ事を得ず實に感慨無量、哀悼の極みであります。」

黒須巳之吉の卓上談

ジーベンマン先生を憶ふ

《追悼録(原文)より》

「ジーベンマン先生は近代耳鼻咽喉科學の開祖として東西獨歩の姿であられた事は皆様の御話の通りであります但其話のうちに臨床家としては餘りお上手ではなかつた様に仰せられました、私は此點に就いて辯護しやうと思ひます。私の先生の門を叩いたのは世界戦争開始の年の暮でありまして折柄醫員の多くが動員せられ手不足であつた爲め遂に先生の助手として勤務する事となりました、助手としては他にウールリヒ氏一人でありまして現教授のオッピコーフェル氏が外來部長でした。斯様な譯で先生の臨床的手腕については私が一番よく知つて居る様に思ひます。先生は手先の巧な方ではなかつたには相違ありませんが非常に大學者であつた以上は必らず上手な臨床家であつた筈で私の拜見した先生の御手並は見事なものだと思ひます。醫術は決して手工ではありませんから之が當然と思はれます、尤も卓越した手腕は矢張耳の手術だと思ひます。乳嘴突起炎の手術に於いて第一繃帯交換の時に外聽道乾燥と云ふ事がなければ其は手術の失敗か後療治の怠慢であると常に云はれ、外聽道の乾燥せない場合には手術は乃公がしたので失敗の筈はない後療治が悪いのだと云つて助手の吾々を責められたが事實その通りであつて先生の手術は常に外聽道は第一繃帯交換に

際して乾燥して居りました而して急性乳嘴突起炎の手術後聽力は殆んど尋常に復するを常規として居りました。

私が、助手時代に尤も苦しかった事は病床日誌の作成でした、先生の教室は設備萬端貧弱で何一つ誇るに足ものはありませんが、三十餘年間に亘る病床日誌を製本して教授室に修めてありますが之こそ先生の實の一つであつて先生が尤も大切にせられたものでした。従つて此の日誌の記載は一に先生の檢閲を経、而も學期末には受持助手を目の前に置き全部通讀し添削を施し然る後に製本屋に送るもので随分嚴重です、或時は小生の記載したる日誌を見て「日本の耳の検査は樂觀的だ Japanese Funktions-prüfungen sind optmitisch など加筆せられた事もありました。小生の杜撰な方法の爲めに「日本の」と書き入れられたる事は吾國の先輩各位に対して申譯ない次第であります。

而して吾々の記載方法の悪しき事を指摘せられずに五年前迄助手をせられたるフォン、アイケン氏の事を賞めそやして居りました中にお人の悪い所もありました。いろいろ先輩の方で思出の多い事もありませうが叱られた度數に於いては私が一番だと思ひます。助手になつた日の朝に大喝一聲に出遭ひ即日御暇をと思つて居ると其日の夕方には唯小兒の如くニコニコ笑つて居られた爲め其儘厄介になる事にいたしました。誠に怖い先生であり同時に又非常に好きな先生でした。」

最後に津田終吉の卓上談。

ジーベンマン先生を追憶して

《追悼録(原文)より》

「ジーベンマン先生が丁度大學教授の職を退かれる折り即ち日本人としてパーゼル大學の耳鼻科研究室で先生に接して居た最後の者として私は先生の長逝に際し皆様と共に哀悼の情を以て當時を追想いたしたいのであります。ジーベンマン先生の學問指導に際しての嚴格さ、並びに日々の勤勉努力振り乃至家庭に於ける日常生活の一端などは先刻より皆様の御話で盡きてありますが私は今も尚ほ深く記憶に貽て居ります先生の御親切であつ

た點を一つ付け加へたいと思ひます。

私が、先生の御高名を慕ふて一九二一年の春バーゼルに着き早速研究室入りを許されました、當時在室先輩として香宗我部氏、坂井清、松本本松氏等の外時々生理教室で作業中の増田現東大教授が来てをられました。奈邊な譯か皆なの君は「アルバイト」が思ふ様に進捗せぬとか、先生より言ひ渡される論文の結末が遅れるとかで毎日寄ると大こぼしの折柄でありました、自分への「テーマ」も二三ジーベンマン先生より示されましたが結末が長がびくとか成績が不明だとかで捨てられたものゝのみにとか兎角新入者に取りては聞き心地の良くない問題のみでとうとう自分も決心して持ち参りました、「アルバイト」を完成した上で先生指導の研究に着手する事にいたしまして日々研究室で其方面の標本製作や記載等に勵みまして論文も書き終わりましたから一應先生の校閲を受け敬意を表すべく持参いたしましたが此の時に普通なれば御自分の指導なされぬ論文の事とて取り上げてもくだされぬ事だらうと恐縮して居りましたのに一應さっと眼を通された上で終りの感謝の辭の個所で先生の研究室を使はして頂いた事に對し感謝すると述べた其の文字に「ダンクパールカイト」なる字がありましたのを先生はちよと「チョコキ」の「ホーケット」から一寸五分位の鉛筆を取り出し（この事は先生が時々なされることで私共の特に眼を引く仕振りです）「ダンク」と文字を訂正して頂いた、扱て此の事柄は何んでもない様に思はれますが一寸普通の人には出来ぬ事で先生の度量の大きい事と親切でありました點を今も尚感謝して居りまするに今や先生此の世に無し嗚呼

哀なし。」

以上 スイス・バーゼル大学ジーベンマン耳鼻科教授追悼録には留学者自らの口で語られたジーベンマン先生の実像、人柄、業績と20年に及ぶ明治から大正時代の日本人留學生の留學生活が語られている。

補 足

式次第の「追悼会出席者氏名」欄の日本人48人とスイス人3人は以下の通りである。

森山知春・林榮次郎・杉浦右門・前原武夫・高橋竹藏・金杉英五郎*・山田喜郎・小此木龍彦・銘苅正太郎・田所喜久馬・村井義男・清水収次・川村守明・岡田和一郎*・佐藤重一・石松榮・入鹿山崇・山口利秋・賀古弓弦・石倉武雄・増田胤次・津田終吉*・川上四男也・小松崎寛・佐々木定右衛門・高崎文雄・田中稔・中村豊*・松本本松・光吉多喜男・本田雄五郎・林熊男・角田郁二・千葉眞一・トーマン*・黒須巳之吉*・大沢林之助・菊池循一・松田龍一・吉田三郎・西山信光・フェルトヴェングラー・佐藤信郎*・颯田琴次・パラヴィチニー*・家坂清次郎・城所信五郎・葛目玄吉・岡野治三・浅井健吉*・義江義雄

*は、ジーベンマン先生追悼会講演者

参加者中から「日本耳鼻咽喉科史 学会創立90周年記念(社団法人日本耳鼻咽喉科学会)」及び日本近現代医学人名事典1868-2011(泉孝英編 医学書院)より略歴

表2 参加者の略歴抜粋

杉浦右門	大正10年東京帝大卒 大正15-昭和5年日本医科大学耳鼻咽喉科第六代教授
金杉英五郎	明治21年ドイツ留学(賀古鶴所と同船) ヴェルツブルク・エルランゲン・ベルリン大学各大学に学び明治25年帰国大正10年東京慈恵会医大初代学長
山田喜郎	東京警察病院第二代耳鼻咽喉科医長
田所喜久馬	明治41年東京帝大卒 共訳ポリツェル耳科学図譜
清水収次	昭和5-12年東邦大学耳鼻咽喉科第三代教授
岡田和一郎	明治35年東京帝大耳鼻咽喉科初代教授

石倉武雄	昭和29年順天堂医科大学耳鼻咽喉科初代教授
増田胤次	大正8-10年スイスジーベンマン教授に師事大正10年東京帝大教授
佐藤重一	大正10年東京帝大卒昭和3-4年東邦大学耳鼻咽喉科初代教授 昭和5年慈恵医大耳鼻咽喉科教授
松本本松**	明治43年慈恵医大卒 大正9年ジーベンマン教授留学 昭和18年順天堂医専教授 松本順(松本良順)軍医総監の8男
光吉多喜男	東京帝大耳鼻咽喉科 現市立函館病院第四代耳鼻咽喉科医長
本田雄五郎	明治39-42年エルランゲン デンカー教授留学 昭和12年日本耳鼻咽喉科医会創立総会常任 理事
千葉眞一	明治31年東京帝大卒 大正7年東京医専教授 明治45年順天堂医院耳鼻咽喉科初代科長 大正5-9年教授
菊池循一	明治31年長崎第五高等学校(現長崎大学医学部)医学部卒業小此木信六郎耳科医院臨床 研修後東京帝大岡田和一郎教授の元で介補第一号 明治34-36年ロストック大学耳鼻咽喉科ケルネル教授留学 大日本耳鼻咽喉科学会会報明治37年編輯主任 宮内省御用掛(大正6-昭和23年侍医)
松田龍一	大正13年東京帝大卒 昭和4-7年熊本大学助教授 昭和6年金沢医大教授 昭和7-9年ドイツ留学 昭和24-38年金沢大教授 昭和39年に本耳鼻咽喉科学会名誉会員
吉田三郎	東邦大学医学部耳鼻咽喉科昭和4-5年第二代教授 三井記念病院第三代耳鼻咽喉科医長
城所信五郎	昭和2年東京帝大卒 昭和37年三樂病院長 昭和45年杏林大学教授
葛目玄吉	東京医科大学耳鼻咽喉科 昭和11年京浜耳鼻咽喉科医会(会長岡田和一郎・西山信光・菊池循一, 理事長千葉眞一)創立時の理事
岡野治三	東京帝大卒 昭和5-22年日本大学第二代耳鼻咽喉科教授 駿河台病院
大沢林之助	東京通信病院耳鼻咽喉科初代医長
西山信光	明治33年第一高等中学医学部(現千葉大医学部)卒 明治36-38年ロストック大学耳鼻咽喉科ケルネル教授留学 40年千葉医専教授 金杉英五郎門下生ドイツケルナー教授留学 昭和11年京浜耳鼻咽喉科医会副会長
颯田琴次	明治45年東京帝大卒 大正18年東京帝大教授 昭和27年東京芸大(音声学)教授
義江義雄	大正15年東京帝大卒 昭和4年東京警察病院耳鼻咽喉科初代医長 昭和8年日医大教授 昭和30年国立らい研究所長
賀古弓弦	森鷗外盟友賀古鶴所の弟の眼科医賀古桃次の長男

**は、ジーベンマン教授耳鼻咽喉科教室留学者

参加者芳名帳

日本人45人及びスイス人3人計48人

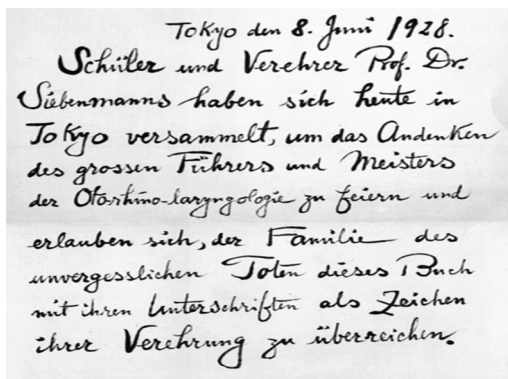


図8

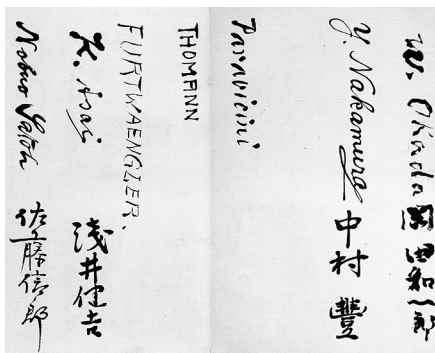


図9

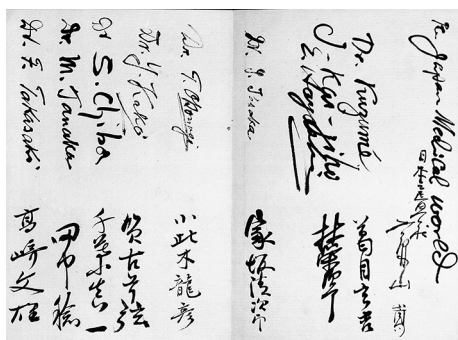


図 10

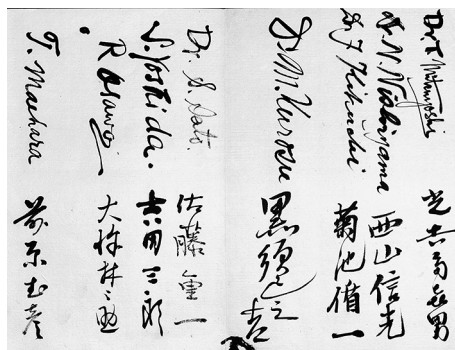


図 11

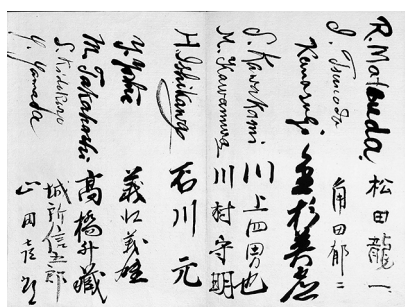


図 12

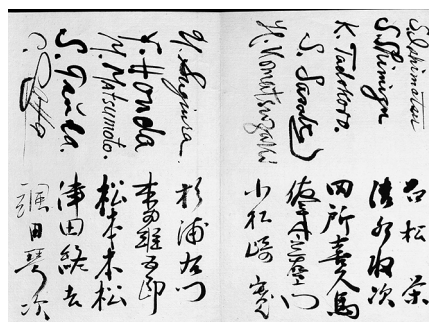


図 13

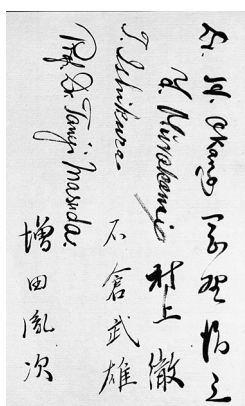


図 14

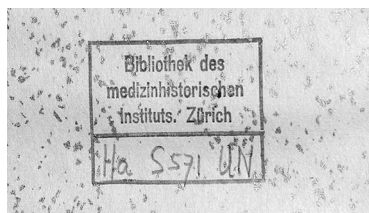
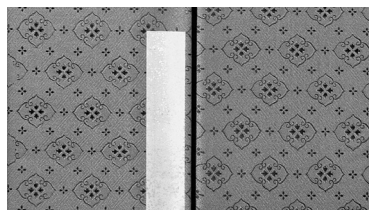


図 15

図 8～15 芳名帳前文及び参加者署名とチューリッヒ医史研究所図書館印

ジーベンマン先生追悼会参加のスイス人 3 人に
関して

トーマン Hans E. Thomann

スイス・バーゼル市ロシュ本社書庫に残されて
いた文書（バーゼル大学現同窓会長 Fröscher 元病

理学教授より提供）によれば、ロシュ日本支社の
薬剤情報責任者で薬学博士、ジーベンマン先生追
悼録及び芳名帳をスイス・パーゼル市ジーベンマ
ン先生未亡人に持参、謹呈。

フルトヴエングラー Furtwaengler, Arnold
Robert Wilhelm

1933年のJAPAN TIMES Year Bookによればスイス出身1898年生まれ。チューリッヒ・ローザンヌ・ミュンヘン大学で学ぶ。外科医。パラヴィチニーの後を引き継いだ横浜の開業医。

パラヴィチニー Fritz Paravicini

1938年のWHO's WHO IN JAPAN (The WHO's WHO IN JAPAN Publishing Office)によれば、友人の誘いで来日し、横浜で開業医となる。来日が古くスイス人コミュニティの中心的役割を担う。1928年ジーベンマン教授追悼会にて謝辞述べる。又Paravicini(パラヴィチニ)は第一次世界大戦及び第二次世界大戦時赤十字国際委員会駐日代表としての活動に関して愛知大学法学部大川四郎教授の詳細な研究資料・文献及び書籍がある。

尚Paraviciniは、原綴に基づきパラヴィチニー又パラヴィチニとした。

以上、チューリッヒ医史研究所図書館保管の1928年6月8日東京学士会館開催のスイス・バーゼル大学耳鼻科ジーベンマン教授追悼録及び芳名帳を資料として関連する補足説明を加えて提示した。

謝 辞

資料提供のバーゼル大学同窓会長Fröscher元病理学教授とバーゼル大学Wichers図書館文書責任者・追悼会スイス人参加者のThomann及びParavicini両博士ドイツ語辞の翻訳の武田信彬東京慈恵会医科大内科元教授・留学生の中村豊名古屋大学耳鼻咽喉科初代教授に関し資料提供の中島務名古屋大学耳鼻咽喉科第七代元教授・追悼会参加者の賀古弓弦の長男賀古暁平元カナダ・オタワ大学教授(カナダ・トロント在住 慈恵医大昭和28年卒)・「日本耳鼻咽喉科史 学会創立90周年記念(社団法人日本耳鼻咽喉科学会)」編纂委員であり賀古鶴所研究家の足立区耳鼻科医木村繁先生・パラヴィチニに関する資料提供の愛知大学法学部教授大川四郎先生に感謝申し上げます。